

一般的な SST と 当支援室の少人数コミュニケーション指導【コミュニケーション・ビルド】の比較

※特定の教室を指すものではなく、一般的な SST グループ指導との違いのイメージとしてお読みください。

項目	一般的な SST グループ指導のイメージ	コミュニケーション・ビルド
指導の目的	あいさつ・順番待ち・ことわり方など、日常場面で使える「コミュニケーションスキル」を身につけることが中心。	スキルの習得にくわえて、その子の“ころ”が少しずつ落ち着き、人と関わることへの安心感を育てること、さらに自己理解と自己肯定感を高めていくことを重視。学校や家庭で以前よりも“安心して楽に過ごせるようになること”を目標にします。
指導体制	指導者 1 名で、決められたプログラムを進行するスタイルが多い。	学校現場を熟知した指導者と、言葉にならないサインや反応を読み解くスタッフという異なる視点をもつ 2 名体制。一人が進行役として全体をリードし、もう一人が子どもたちの表情・声のトーン・身体の動き・人間関係の変化などをていねいに観察しながら、場とこころの状態を支えます。
プログラムの内容	テキストやワークシートにもとづいて、説明 → ロールプレイ → 振り返りを行う形が中心。	自己表現のワーク、協力して行う遊び、自己開示の練習などを組み合わせ、子どもたちが「ここなら多少失敗しても大丈夫」と感じながら試せる場をつくります。必要に応じてソーシャルストーリーズも活用し、こころの準備や見通しも整えます。
子どもの反応への扱い	その場での困りごとには触れるが、「なぜその場面で強く反応するのか」までは扱いきれないことも。	イライラする・固まる・泣いてしまう・ふざけてしまうなど、反応が大きくなった場面を一つひとつ拾い上げて分析します。その子のこころにとって何が負担だったのかを整理し、次に同じような場面になったときの具体的な対応や声かけ・環境調整を提案します。
保護者との連携	セッション後に簡単な様子をお伝えする程度の場合も多い。	春・夏の保護者面談や隔月の指導報告を通して、家庭・学校での様子をうかがいながら、お子さんのこころに無理のない関わり方や言葉の選び方を提案します。スタッフ間でも子どもの変化を共有しつつ、保護者と一緒に中長期で変化を見守っていくスタイルです。
学校とのつながり	「学校でも使えるスキル」を意識しつつも、実際の学級運営や先生の視点までは踏み込みにくい。	学校現場での勤務経験をもつスタッフが、教室での見え方や先生側の受け止め方もふまえてアドバイスします。「先生にはこう伝えると話が通りやすい」「こういう配慮があると、お子さんのこころが少し楽になる」など、学校との橋渡しも行います。
変化のとらえ方	「〇回でこのスキルを練習」など、一定期間でのスキル習得を目安にすることが多い。	スキルの変化だけでなく、人と関わるときの緊張の強さ・こころの疲れやすさ・安心感といった内側の変化も大事にしています。家庭・学校と連携しながら、その子のペースに合わせて、こころの土台づくりをゆっくりと積み重ねていきます。